

氏名	ほそ だ なお み 細 田 尚 美
学位(専攻分野)	博 士 (地域研究)
学位記番号	地 博 第 37 号
学位授与の日付	平成 19 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
研究科・専攻	アジア・アフリカ地域研究研究科東南アジア地域研究専攻
学位論文題目	フィリピン・サマル島からの向都移動とその社会文化的側面に関する 考察
論文調査委員	(主査) 教授 杉 島 敬 志 教授 田 中 耕 司 助教授 伊 藤 正 子

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、フィリピン・ビサヤ地方のサマル島からマニラへの向都移動と移民が母村とのあいだでおこなうコミュニケーションに焦点をあて、移動という現象をそれを成り立たせている文化的枠組との関連において、記述・分析することを目的としている。

序章では、これまでに蓄積されてきた人の移動にかかわる先行研究が概観される。その大半は統計資料や量的調査にもとづき、移動を経済格差や人口圧力から説明するものであった。また、近年の移動をめぐる人類学研究では、人の移動にかかわる親族ネットワークの役割に大きな関心が向けられてきた。序章では、こうした先行研究が批判的に検討され、文化的枠組に着目する移動研究の意義が提示される。

つづく第1章では、文献史料や人口統計等にもとづいて、19世紀以降のサマル島の社会経済史が通観され、19世紀前半以前からサマル島をふくむビサヤ地方は人口の流動性が高かったこと、19世紀末から20世紀前半の時期にはアバカやココヤシ栽培の適地をもとめて近隣の島々からの自発的なフロンティア開拓農民が来島したこと、20世紀後半からはマニラ等の都市部への移動が増加するようになった状況がのべられる。

第2章は、第1章における論述と関連づけながら、サマル島における主な調査地であるバト村に焦点をあて、人の移動の歴史が描き出される。バト村は19世紀末以降にサマル島内外からココヤシ栽培の適地を求めてやってきた開拓農民によって形成されたこと、その後もより良い土地を求めてバト村から他地域への移住がおこなわれたこと、さまざまな要因が重なり1950年代から向都移動が始まり、1970年代にはバト村の「分村」がマニラに形成されるにいたったことなどがのべられる。また第2章の後半部では、こうした人の移動と関係する親族ネットワークの様態や役割が記述・分析され、家族・親族の基本的な構成原理が明らかにされている。

第3章では、バト村出身の移民たちの人生や生活にかかわる語りの分析をとおして、彼らにとって移動がサバララン（幸運探し）を目的とする行為であることがのべられる。サバラランとは、「幸運」を求めておこなわれるリスクをとまなう投機的行為であり、向都移動だけでなく、開拓に行く、商売を始める、進学する／させる、海外就労や国際結婚をする等々の行為がふくまれる。第3章では、このことを第2章における論述と関連づけ、サバラランを目的とする行為が何か良いことを求めて別の土地への移動を繰り返してきたビサヤ地方ひいては東南アジア島嶼部のフロンティア地域に広くみられる生活様式の延長上にある行為であることが論じられている。

第4章では移民と母村にのこる家族・親族とのコミュニケーションが分析の対象にされる。向都移動をおこなった移民の多くは、母村とのつながりを保ち、さまざまな方法で家族・親族との交流をつづける。また、移民はフィエスタ等の際に都市でえた「幸運」のあかしとしてパサルボン（おみやげ）をもって帰省し、村に多額の寄付をおこなう。第4章では、こうした移民と家族・親族とのコミュニケーションの様態が記述・分析されるとともに、「幸運」の獲得者として社会的に認められるには、移動先での成功だけでは不十分であり、家族・親族による承認が必要であることや、母村や母村におけるフィ

エスタはそうした承認が与えられる場になっていることが明らかにされる。

終章では、第1章から第4章までの論述が概括されるとともに、序章における問題設定に立ち返り、移動という現象や移民と母村との関係を理解するには、移動する人々の生活様式の全体を視野に入れる必要のあることが力説されるとともに、本論文では十分に論じられなかったいくつかの事象が将来の研究課題として言及されている。

論文審査の結果の要旨

フィリピンは海外就労者の主要な送り出し国のひとつであり、国内においても向都移動が盛んにおこなわれてきた。こうした状況を反映し、フィリピン人の移動については国内移動、国際移動ともに多くの研究が蓄積されてきた。しかし、その大半は統計データや量的調査にもとづき、移動を経済格差や人口圧力から説明してきた。また、移動をめぐる近年の人類学研究の多くは移動を支え、拡大する形で作用する親族ネットワークの役割に着目するものであった。そのために、移動という現象の基底にあって、それを成り立たせている文化的枠組に着目し、それとの関連で移動や移民と母村との関係を包括的に理解しようとする試みは皆無に近かった。このような学史的背景のもとで、本論文の学問的貢献として次の4点をあげることができる。

1) 本論文には、フィリピン・ビサヤ地方のサマル島のバト村とそのマニラにおける「分村」ともいうべきP通りで申請者がおこなった2年数ヶ月におよぶフィールドワークの成果が遺憾なく発揮されており、バト村出身の移民たちの人生や生活にかかわる語りの分析をとおして、移動という行為や移民と母村にのこる家族とのコミュニケーションがどのような文化的枠組との関連で遂行され、認識されているかが精細に描き出されている。

2) バト村出身の移民にとって、移動はサバラランとよばれる、「幸運」を求めておこなわれるリスクをとまなう投機的行為と見なされている。申請者は、東南アジア島嶼部の民族誌を広く参照するとともに、文献史料と口承史にもとづいてバト村やサマル島の社会経済史を再構成することで、サバラランは何か良いことを求めて別の土地への移動を繰り返してきたビサヤ地方ひいては東南アジア島嶼部のフロンティア地域に広くみられる生活様式の延長上にある行為であることを明らかにしている。

3) 移動を経済格差から説明する研究では、移民が母村に住む家族におこなう送金に大きな関心が向けられてきた。しかし、移民からの送金を最も重要な収入源とする世帯はバト村全世帯の1割にすぎず、バト村からの向都移民のうち収入があっても母村の家族に送金していない者の割合は30パーセントに達する。本論文は、移民と母村に住む家族・親族とのあいだでおこなわれる様々なコミュニケーションの様態を包括的にとらえ、送金をその一部として理解する新たなアプローチの有効性を説得的に論じている。

4) 移民は母村とのつながりを保ち、さまざまな方法で家族との交流をつづける。そこには送金だけでなく、手紙・電話・伝言のやりとり、家族へのパサルボン（獲得した「幸運」のあかしとしての「おみやげ」）を持参しての帰省、母村への寄付にくわえ、バト村からマニラにやってくる家族・親族への生活支援や職の斡旋などがふくまれる。こうした多様なコミュニケーションにかかわる詳細な記述と分析をとおして、申請者は、それらが東南アジア島嶼社会に広くみられる生命の授受や生存の支え合いを基本的な構成原理とする親族関係のあり方に則したものであることや、母村および母村でのフィエスタがこの構成原理の体現者をサバラランによる「幸運」の獲得者として称揚し、承認する場となっていることを明らかにしている。

以上でのべたように、本論文は、文化的枠組に着目することで移動という現象や移民と母村との関係についてどのような研究が可能であるかを鮮明かつ具体的に示しており、フィリピンの移動研究に新たなパラダイムを提供する可能性をもつ研究として高く評価できる。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成19年1月25日、論文内容とそれに関連した事項について試問した結果、合格と認めた。